

2020年 東京オリンピック・パラリンピック開催へ向けて



“スポーツには、世界と未来を変える力がある。”というビジョンが掲げられた東京オリンピック・パラリンピックは、日本経済にとっても大きなチャンスとなる。大会を成功に導き、真の共生社会の実現に向けて、「変革と進歩を新たなレガシーとして次の世代へ」引き継ぐためには、どのような準備が必要なのか。大会に向けた現状と課題について紹介する。



I N D E X

- 東京オリンピック・パラリンピック2020委員会 第1回会合・・・ P03
「東京大会に向けた取り組みや課題、経済界への期待」
講演：竹田 恆和 氏 日本オリンピック委員会 会長
- 新年会員懇談会・・・ P04
「パラリンピック開催へ向けて」
講演：山脇 康 幹事／日本パラリンピック委員会 委員長
講演：河合 純一 氏 日本パラリンピアンズ協会 会長
- パラリンピアン紹介・・・ P08

東京大会に向けた取り組みや課題、経済界への期待

東京オリンピック・パラリンピック2020委員会が第1回会合を開催した。2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催の成功に加え、レガシーを次代に継承していくために、経済界ができることは何か。現状の課題や経済界への期待について竹田恒和日本オリンピック委員会会長が語った。

国民が一体となって取り組み 未来に多くのレガシーを残す



講演: 竹田 恒和 氏
日本オリンピック委員会 会長

史上最もコンパクトな 大会を目指す

東日本大震災後に行ったアスリート等による被災地での支援活動を通じて、あらためて子どもたちに夢と希望を与えるスポーツの持つ力を実感した。1964年に開催した東京大会は、日本人に誇りと自信を持たせてくれた。被災地の子どもたちや次世代を担う若者に、ぜひそうした経験をしてもらいたいという思いが東京オリンピック・パラリンピック招致の原動力になった。被災三県の知事の賛同も得られて、招致活動に取り組んだ。

招致成功の要因は何といっても、政府、自治体、経済界、スポーツ界、国民、都民などがオールジャパンで取り組んだ結果だと考える。国民の招致に対する支持率は70%を超えた。

開催決定後の2014年1月に組織委員会を立ち上げ、「スポーツには、世界と未来を変える力がある。1964年、日本は変わった。2020年、世界を変えよう」という新しいビジョン骨子を策定した。そして「すべての人が自己ベストを目指そう」「一人ひとりが互いを認め合おう」「そして未来につなげよう」という三項目の基本コンセプトを掲げた。

2020年大会は、史上最もコンパクトな大会を目指す。37施設中15は前回の施設をリニューアルする。残り22施設のうち11は仮設、11は常設となる予定だ。座席数8万のメインスタジアムでは、開閉会式、陸上競技、サッカー、ラグビー等を実施する。大会後は文化イベントやコンサートにも使用する予定だ。

今回の大会の経済効果について、東京都では3兆円、15万人の雇用を生むと試算した。一方、日本総合研究所では7兆～12兆円、雇用も40万～70万人と試算している。それ以上の経済効果があると推測する向きも多い。

将来に向けて 有形・無形のレガシーを残す

大会の成功には、大会後に有形・無

形のレガシーをどう残すかが課題となる。有形のレガシーでは、新国立競技場などの競技場が夢を届ける施設になる。1万7,000人を収容できる晴海の選手村は、大会後は一般に分譲される。そのほか、道路や交通システム整備、施設のバリアフリー化、電柱の地中化、燃料電池車の導入、緑の拠点を街路樹で結ぶ「グリーンロード・ネットワーク」など多彩なプロジェクトによって、東京のまちが住みやすくなるだろう。

一方、無形のレガシーでは、スポーツの素晴らしさを次世代に伝え、多くの人々にスポーツに参加してもらうことが重要だ。スポーツを通じた健康的なライフスタイルの促進も課題である。

今回の大会の意義は、「国民が同じ価値を共有して、同じ方向を向くこと」だと思う。国民が一体となって取り組むことで、世界からリスペクトされ、国力の回復が実現する。そのためには、企業の皆さまの協力が欠かせない。東京大会のパートナー企業については、組織委員会のマーケティングが1月からスタートした。興味のある企業があれば、ぜひご協力いただきたい。

また、2020年に向けてさまざまなイベントが開催される。大会を支えるボランティアも8万～9万人が必要だ。そこでも、多くの企業の皆さまにもご支援・ご協力をいただければありがたい。

新年会員懇談会

1月15日開催

パラリンピック開催へ向けて

2012年ロンドン・パラリンピック大会は大きな盛り上がりを見せ、その中で多くの日本人アスリートが活躍した。同じように東京大会を成功させるために、企業や個人には何ができるのか。山脇康日本パラリンピック委員会委員長と河合純一日本パラリンピアンズ協会会長が選手を巡る現状と課題を語った。



より一層の認知度向上を目指す



挨拶：長谷川閑史
代表幹事

これまでに多くの日本人選手が活躍したパラリンピックは、2012年ロンドン大会では金メダル5個を含むメダル16個、2014年冬季ソチ大会では金メダル3個を含むメダル6個を獲得した。

スポーツをする機会やその環境の充実が一層進展し、広く浸透していくものと期待されている。

経済同友会では、「東京オリンピック・パラリンピック2020委員会」を設置している。アスリートの支援をはじめ、障がい者スポーツの普及と認知度の向上を目指し、協力していきたい。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、障がいのある方が

パラリンピックで社会意識の変革を

講演：山脇康 幹事／日本パラリンピック委員会 委員長



パラリンピックはハイパフォーマンスなスポーツ競技

障がいに当たる英語は、disabilityであるが、パラリンピアンは、ability、すなわち、人間の可能性を教えてくれる。「何ができないか」ではなく「何ができるか」だ。パラリンピックは、「障がい者ががんばっているスポーツ大会」ではなく、「人間の可能性を追求する大会」である。

第二次世界大戦後、戦争で障がいを負った兵士の治療と社会復帰のために取り入れたスポーツの大会がパラリンピックの原点である。パラリンピックと

いう言葉は、1964年東京オリンピックの際に、日本人が名付けた。Paraplegia（対まひ者）とOlympicとを合わせたParalympic（パラリンピック）として、大会を開催した。この大会のレガシーとして翌年、財団法人日本身体障がい者スポーツ協会が設立され、障がい者スポーツ大会へと発展を遂げた。パラリンピック史上、東京大会は極めて重要な意味を持ち、あらためて2020年が注目されている。

現在、パラリンピックはオリンピックとは異なるハイパフォーマンスな競技性の高いスポーツイベントになっている。

その観客数はオリンピック、サッカーW杯に次ぐ第三のスポーツ大会に成長したほどだ。2020年東京大会では、約4,500人の選手による22競技、約530種目が予定されており、ロンドン大会を上回る観客数と、テレビ、ソーシャルネットワークの視聴率達成を目指している。

しかし、日本人選手は2004年アテネ大会以降、同大会を上回る数の金メダルを獲得していない。そこで2020年には金メダル数で世界7位以上を目指し、選手の育成・強化に取り組んでいる。

そのためには選手の世代交代、育成・強化支援、人材発掘、指導者の育成、戦略の強化、支援体制の整備などパラリンピックへの支援がますます重要になる。加えて、選手がトレーニングや競技に専念でき、競技力の向上を図ることができるよう環境整備が必要だ。

昨年4月、スポーツ行政が文部科学



であり、それが最も重要なパラリンピックのレガシーと言っても過言ではない。パラリンピックがこうした共生社会への第一歩になると確信している。

日本の力と未来を 世界に示す

企業とのかかわりでは、CSRの一環としてパラリンピック支援に取り組んでいるケースがある。最近ではCSRではなくOpportunity（機会）にとらえ、積極的にパラリンピックを取り込み、企業のブランド価値を高めようとする動きも見られる。また経済同友会が協力している、JOCによる「アスナビ（アスリートの就職支援）」の対象者が、パラリンピアンへと広げられ、これまでに6人の選手の就職が決まるなど、着実に実績を重ねている。

レガシーは黙っていて残るものではない。残すべきものは何かを議論して決め、今後五年間は、そのためのアクションプログラムに取り組むことが重要である。経済同友会にもぜひ、そのプログラムに参加していただき、共に未来につながるレガシーを残してほしい。皆さん一人ひとりがパラリンピックを推進するムーブメントとなり、イノベーティブな東京大会をつくり、日本の力と未来を世界に示したい。

省に一元化された。それに伴い、パラリンピックへの強化支援が拡大し、オリンピックと同様のサポートが適用されている。例えば、味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）をオリンピック選手と共同利用し、それを前提とした設備の拡充が進められている。

一方で、中には、ほとんどがボランティアで運営され、事務処理や運営能力が不十分な競技団体もある。コーチや支援スタッフの強化も大きな課題で、国や民間による人材面、資金面での援助が不可欠である。

パラリンピックのレガシー 共生社会への社会の変革

パラリンピックにはどのような意義があり、未来に向けて、どのようなレガシーを創り出すのか。

パラリンピアンは、失われた機能を補うために、残された機能の潜在力を、健常者の何倍にも高めて闘う。競技を

観戦すると、選手から熱いメッセージを受け取ることができる。「失われたものを数えるな」「残された機能を最大限に活かす」「人間の持つ能力の限界を極める」。大観衆に囲まれた舞台で、選手たちが最高のパフォーマンスを発揮することができれば、観客は興奮の渦に巻き込まれ、素晴らしい感動や勇気を得るだろう。人間の持つ潜在能力に驚愕するだけでなく、選手たちの挑戦し続ける常に前向きな姿に魂が揺さぶられ、自分の生き方に大きな影響を受けるかもしれない。Impossibleは、少し変えれば「I'm possible」になるというメッセージが、ソチ大会の閉会式で掲げられた。不可能を可能にする力をパラリンピックで感じるだろう。

このような体験が、障がい者に対する意識や社会の変革につながるのではないか。人々の意識の変革こそが、分け隔てのない多様な個性を受け入れる包括的な社会の構築に最も必要な要素

日本のパラリンピック選手 強化の現状と課題

講演：河合 純一氏 日本パラリンピアンズ協会 会長



練習場所と費用と 指導者に課題

2020年の東京パラリンピックを成功に導く要素は二つあると考えてる。

一つは、日本人選手が一つでも多く

の金メダルを獲得すること。もう一つは、大歓声があふれる満員の競技会場で、選手がより良いパフォーマンスを発揮することだ。これらを実現するためにできることは何かを考えてみたい。まず、選手の抱える競技活動上の課

題は、練習場所と費用と指導者にある。練習時間は以前に比べて増えているものの、練習場所は不足している。主な練習場所は障がい者スポーツセンターや公共施設だが、民間のスポーツクラブでは入会を拒否されるケースがあるのも事実だ。

競技を行う上での自己負担額は、年間平均140万円であり、選手一人ひとりの負担が増えている。その理由は、世界の競技レベルが上がっているから

である。世界のトップクラスの選手と闘うには、より高いパフォーマンスを発揮することが求められるため、専任（パーソナル）コーチに指導を受ける選手が増えてきている。このような選手ほどメダルを獲得しており、この状況は、まさにオリンピックと同じである。

経済同友会の協力により「アスナビ」で企業に採用された選手も増え、選手への競技環境の整備が進んでいる。しかし、コーチについては、いまだボランティアに近い状態である。コーチにも指導による収入が必要であり、今後改善していかなければならない。

競技環境については、ハイパフォーマンスを実現するために、すべての強化に関する施策をオリンピックと同様にすべきと考えている。共有できるところは共有していくことが必要だ。競技指導方法の活用、コーチやスタッフなどの人材の共有、より高いパフォーマンスを実現するための医科学支援の共有・転用など、ソフト面での共用化を進めていくことが効率的である。意識改革を含め、オリンピックとパラリンピックの共同化をどう進めていくかが課題である。

アスリートの力を活かす 就労のあり方

次に企業と選手の雇用、就労の問題を考えてみたい。

アスリートの就労形態には「業務優先」「業務調整」「競技優先」という三つのパターンがある。時代を追ってみると、業務優先だった1990年代。そして世界レベルに追いつくために企業と調整しながら競技に向かった2000年代。さらに現代は、プロに近い競技優先でないとパラリンピックに出場できない、もしくは出場してもメダルに手が届かない状況である。

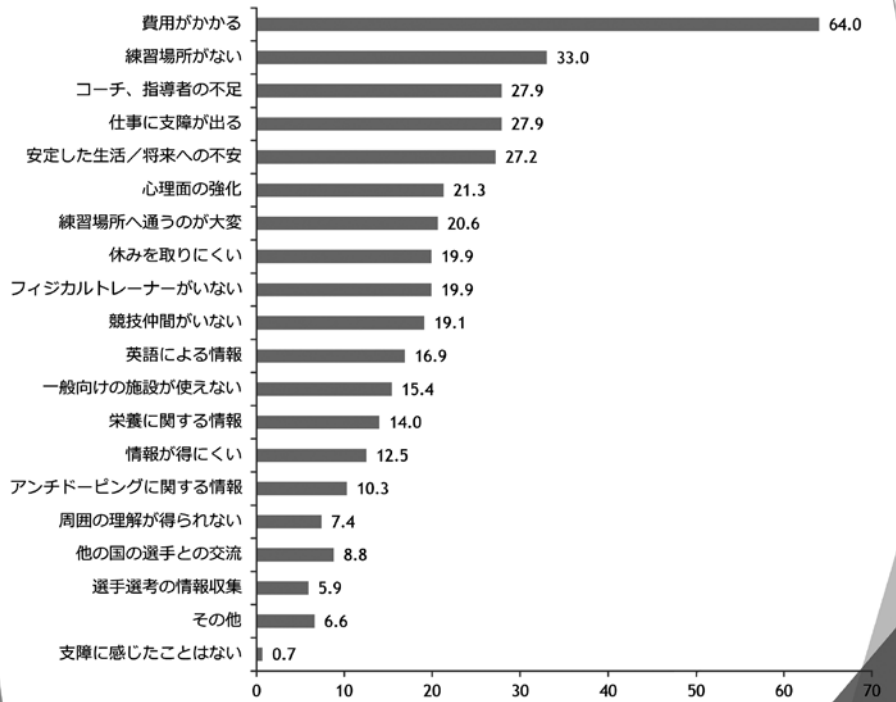
もし、これから2020年東京大会出場を目指したいという選手がいたら、ま

ずは競技優先で雇用していただき、引退後は、企業の戦力として活用いただくことが望ましい。選手たちは、メダルを獲得するという具体的な目標のために日々努力、工夫し、周りの協力を得ながら成果を出す、というプロセスを体現している。これは企業がビジョ

ンを掲げて目標を立て、それに向かって経営資源を投入し、企業内外の方々と連携して業績を上げることと同様ではないかと感じる。必ず、企業活動に貢献できる人材になるはずであり、ぜひ、長い目で見ていただき、選手の持っている能力を企業で活用していただき

パラリンピック選手が感じる競技活動上の課題 費用、練習場所、コーチ・指導者の不足が大きな課題

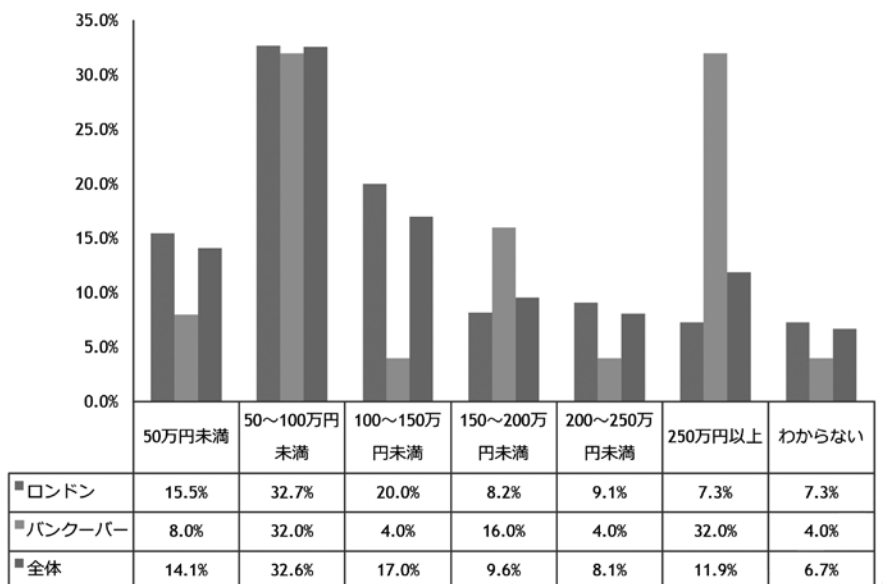
※講演資料より



競技スポーツを行うためにかかる経済負担

競技スポーツ活動にかかる年間個人負担額(平均額を提示)

※講演資料より



たい。さらに、従業員がパラリンピック選手を応援することで、社内の一体感の醸成に貢献するとともに、選手が発する人間の持つ可能性をメッセージとして受け取ることもできるだろう。パラリンピック競技を体験するプログラムを社員教育の一環に取り入れている企業もあり、人材育成面での貢献もできるのではないかな。

企業の皆さまには、2020年に東京パラリンピックで金メダルを多く獲得すること、競技場を満員にすることへのご支援を、ぜひお願いしたい。

質疑応答

Q 日本では、まだ、オリンピックとパラリンピックに対する投資の額に違いがあり、価値に大きな差があるように感じる。われわれが五年後に向けて準備していくに当たり、パラリンピックの価値をどのように考えればよいか。

A 【山脇】オリンピックがプロ化し、スポンサーと結び付いたのは、1984年のロサンゼルス大会以降である。コマーシャルと密接に結び付いて、大きな価値を生んできた。パラリンピックはまだこれからであるが、それだけに潜在的な価値が大きいのではないかな。パラリンピックを見ていただければ分かるが、人間の可能性や潜在能力を究極的に見せてくれる。できる限り多くの人に競技場に足を運んでもらい、競技や選手自身の魅力を見てもらいたい。潜在能力という価値を、メディアが支援することにも意義がある。

【河合】まさに障がいがあるということが決定的な違いである。しかし、足が動かない、目が見えないという中で、全力でプレーをしてパフォーマンスを見せる点に、スポーツが本来持つ精神を見いだすことができる。スポーツの面だけではない。障がいのある人の割

パラリンピックで勝つために必要なこと ⇒オリンピックとのイコールフィッティング

※講演資料より

強化拠点 オリンピック選手同様の強化拠点（資源の共有） ■オリンピック選手に必要な強化がパラリンピック選手にも同様に必要である 	コーチ・サポートスタッフ オリンピック選手に対する競技指導のノウハウの活用（人材の共有） ■いわゆる「障害者」に関する知識だけを有するより、競技に関する高い専門性を有する指導者・スタッフが必要 
医・科学サポート オリンピック選手同様のサポートを基本とし、より高いパフォーマンスを実現するための医科学支援の構築（知見の共有） ■スポーツ医・科学支援（知見の共有） ■競技特性、障害特性にかかわるフィジカルトレーニングの理論研究・実践への応用 ■パラスポーツの器材開発 	

合は、人口の中で一割を占めるといわれるが、例えば転んで足を捻挫したなど、けがにより一時的に不自由な人や妊娠中の人などを合わせれば、二割を超えるといわれている。そもそも日常生活で不自由や不便を感じたことがない人の方が少ないだろう。高齢化社会の最先端を進む日本の中の東京で、パラリンピックの大会が行われることに価値があり、大きな影響力を持っていると思う。私も障がいがある当事者であり、確かに目が見えないことで困ることはある。しかし不自由、不便であることが不幸か、といえば、そうではない。高齢で老眼が進行して見えにくくなるのと、弱視であるということに、そう大きな違いはないと思っている。私たち障がい者が、障がい乗り越える方法を示していくことで、年々いることを前向きに受け止め、ポジティブに生きていく力になれば、日本のさらなる活力になるかもしれない。このパラリンピックを通じて、どう社会を変えていくのか。パラリンピックの価値を、このようにとらえていただければと思う。

Q 企業による寄附などのほかに、個人レベルでの支援を広げることが、資金や観客を増やすことにつながっていくのではないかと考える。個

人のかかわりでパラリンピックを盛り上げるアイデアがあるか。

A 【山脇】ビジネスをしてきた人の中にもたくさんのアイデアがあると思う。個人の資金を集めるには、クラウドファンディングのようなやり方もあるだろう。選手が学校に出向き授業を行うことで、たくさんの人と触れ合う取り組みもしている。皆さんの知恵やアイデアを持ち寄って、実行に移していくことが重要ではないかと感じる。東京大会を成功させる鍵は、どれだけ多くの個人がパラリンピックにかかわりを持つかにかかっているのではないかな。

Q ロンドン・パラリンピックの観客数270万人という数字は、以前に比べて圧倒的に多かったが、何がそれほど人を引きつけ、またそのような状況を作り出すためにどのように取り組んだのか。

A 【山脇】選手が活躍したことはもちろんだが、特にイギリスの公共テレビのプロモーションが良かったこと、そして組織委員会が観客動員のために多くのプログラムを作ったことが挙げられる。8万人収容の競技場が毎日観客で埋めつくされていた。ぜひ、東京パラリンピック大会でもそれを実現させたい。

パラリンピアン紹介



田口 亜希 氏／ライフル射撃

43歳。2004アテネ大会7位、08北京大会8位、12ロンドン大会日本代表。

クルーズ客船「飛鳥」で働いていましたが、25歳の時に病気で足を悪くしました。まずは会社への復帰を図りました。働くことの喜びを覚え、そのうちに趣味で射撃を始めるようになりました。当初は自分のできることを一つひとつこなしていくだけでしたが、いつの間にかパラリンピックを目指すようになり、目標を持つことができました。ぜひパラリンピックを見ていただき、目標を持つことの素晴らしさを知ってほしいと思います。



高桑 早生 氏／陸上競技

22歳。2012ロンドン大会7位、14アジアランキング1位。

中学一年生の時に骨肉腫で左足を切断し、以降義足で生活しています。その後、陸上を始め、7年になります。大学では、恵まれた環境で競技をさせていだいたおかげで力を伸ばすことができ、2012年ロンドン大会に出場することができました。無事就職が決まり、今度は社会人アスリートとして頑張っていけます。私が初めて障がい者スポーツを見た時の感動を、ぜひたくさんの方に知っていただきたいと思います。



山田 拓朗 氏／水泳

23歳。2004アテネ大会日本代表、08北京大会5位、12ロンドン大会4位、14アジアパラ競技大会1位。

生まれつき左腕のひじから先がありませんでした。3歳から水泳を始め、パラリンピックにはアテネ、北京、ロンドンの各大会に出場することができました。パラリンピックではまだメダルを獲得していませんが、2014年アジアパラ競技大会では50m自由形、100m自由形、200m個人メドレーで1位になることができました。リオ、および東京では、メダル獲得を目指して頑張ります。今後とも応援をよろしくお願いします。



木村 敬一 氏／水泳

24歳。2008北京大会5位、12ロンドン大会2位（開会式旗手）、13世界選手権1位。

生まれつきの全盲で、10歳の時に母の勧めで水泳を始めました。パラリンピックは、北京とロンドン大会に出場させていただき、ロンドンでは、100m平泳ぎで銀メダルを獲得しました。今後も競技を続けることで、リオおよび東京では、まだ取っていない金メダルを目指して頑張っていきたいと思っています。ぜひ、皆さんも競技会場に足を運び、障がい者スポーツの魅力を感じ取っていただきたいと思います。



三浦 浩 氏／パワーリフティング

50歳。2008世界ランキング10位、12ロンドン大会日本代表。

東京オリンピックが開催された1964年10月に生まれ、36歳の時、事故で脊髄損傷を負いました。その後パワーリフティングに出会い、パラリンピック出場の意志を固めました。2008年に世界ランキング10位に、ロンドン大会では9位に成績を伸ばすことができました。東京オリンピックの年に生まれたということと私の人生が重なり合って、2020年東京大会にも出場することが天命だと思っています。



大堂 秀樹 氏／パワーリフティング

40歳。2008北京大会8位、12ロンドン大会6位、14アジアパラ競技大会4位。

18歳の時にバイク事故で脊髄損傷を負い、車いす生活が始まりました。病院で知り合った同じ脊髄損傷の人が、パワーリフティングの競技者で、私はその人を倒したいという理由でパワーリフティングを始めました。それがいつしか世界の頂点を目指すようになりました。この競技は、健常者と対等に闘えるスポーツでもあり、世界記録では、障がい者の方が好成績を残しています。ぜひご覧ください、応援してください。